

日本

ハンザキ研究所ニュース 2008(7) : 通巻 No. 30

発行 2008年6月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: j-hanken@sasayuri-net.jp

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....

モリアオガエル産卵観察会の実施

高い木の枝に白いこぶし大の塊、その下には池や水溜りがあり、イモリが待ち受けている。それは憧れの的であったモリアオガエルの卵塊だ。梅雨の風物詩としても毎年新聞紙上を飾っている。その産卵の現場に初めて出会ったのはオオサンショウウオの夜間調査をしていた時だった。しかし、その木の枝の下には水溜りが無かった。くぼみはあったので、孵化する頃には雨水が溜まることを期待しての産卵だったのだろうか？ ただ、そんなに都合よく雨が降るのだろうか？ 疑問だらけの生態であったが、当ニュース（4・5・6・16・17号）で再々紹介してきたように「モリアオガエルはいい加減な産卵」行動を繰り返しているように見える。

平成18年に、十数年間干上がっていた校内の「しんゆう池」に谷の水を引いた。3月に水が入り、5月の中旬にはモリアオガエルの産卵が見られるようになった。7月の上旬まで産卵は続き、50卵塊ほどが周辺の枝や草、石に産み付けられた。池端の草や石に産み付けられた様子はあまり見栄えが良くない。それにしても十年以上も水の無い池に水を入れたとたんにこれだけのカエルが集まってきたのには驚いた。池の名は「モリアオガエルの池」と変更した。

そして昨年もほぼ同数の産卵が見られたことと、5月から6月にかけて生暖かく雨模様の夜は産卵日和であることも分かってきた。この感激的な光景を多くの方々に見せてあげたいという思いが強まり、観察会をすることにした。しかし、事前の広報と日程の方は生き物の都合を無視したものになるのはやむをえぬところである。そこで、事前にビデオで産卵行動の全てを収録しておき、それを見ていただくという次善の策を用意した。この撮影には柿木研究員のパワーが十分に発揮され素晴らしい映像が用意できました。ハンザキもそうですし、水族館時代にウミガメ館長の下で調査していたアカウミガメも夜間の調査が中心、モリアオガエルも夜という何ともシンドイ相手ばかりです。でも、それが専門の研究者から見捨てられていた生き物ということなのかもしれません。ただ、モリアオガエルの場合は朝方の産卵が多く、少し早起きすればいいということや昼間でも産んでくれることがあるので、観察を密にすれば良いと言う有利な点があります。

池の南側にはヨシズでブラインドを設置し隙間から観察できるようにしておいた。また、

池の真上には照明を付けておいた。さらに産卵の基盤が不足していたので、杉の枝を立てて目の前で産んでくれることを期待した。これらの準備は5月の半ばにしておき、カエルたちに慣れてもらっておいたので、5月19日から順調に産卵が続いていた。しかし、広報の準備などで予定が遅れてしまい産卵のピークを過ぎた21日に設定することになった。

観察会の前夜には産卵があり、天候も雨模様でありうまくいくかなと期待したが、なかなかそうはいきませんでした。参加者13名とスタッフ8名はビデオを見ながら柿木講師の話聞きつつ産卵が始まるのを待ちました。18日までは晴天続きでしたが、19日からは雨になり観察会翌日まで続き天候条件は上々だったのです。ビデオが終わっても産卵が始まらないのでプールのハンザキの夜の生態を見ていただいたりしました。それはそれなりに感激してもらえたのですが、肝心のカエルの方は結局だめだったのです。高いサクラの枝に数匹が登っていたので期待したのですが・・・明け方になって2つの卵塊が産み付けられていました。どうも、モリアオガエルの観察会は民宿に泊まってもらい、早起きをして開催する方が確実かもしれません。夜は夜でそれなりに雰囲気があって良かったと思いますので、宵と明けの2回を計画するのもいいかもしれません。

野生の動物ですから見る側が我慢、根競べでひたすら待たねばならないところがこの観察会の難しいところです。今回のイベントを参考にして来年は是非見ていただけるようにさらに工夫を試みたいと考えています。

.....

創意工夫の大切さ

世間ではモノマネが流行っているようだ。パクリという行為は手軽であるから、ついついやってしまうのであろう。しかし、苦勞して他にないグッドアイデアを生み出したときの感激は何物にも変えがたいものだ。当地の「民宿こうちゃん」のお母さんは「こうちゃんうどん(あまごうどん)」をメニューに加えている。それはアマゴの天ぷらに乗せただけのシンプルなものなのだが大変おいしい。気に入ったので写真を撮って“ハンザキ研所長お勧め”とコメントを入れてお店に勝手に張り出している。評判は上々のようだ。すぐ近くの黒川養魚場では「あまご丼」を考案している。これもまた非常においしいのでこの二つのメニューをあちこちでしゃべったり知人を連れて行ったりしている。街中に無い独自の工夫で何とか当地産の名物になってほしいと思う。

私が非常勤講師をしている日本工科専門学校から手土産を頂いた。何と瓦せんべいに校章と校名が焼き印されていた。これもアイデア賞だと感心したが真似をしたいと思う。どうも出だしの言葉に反するようだが、少々工夫をして独自性を出して見たいと考えている。ハンザキの金型を作りたいが結構な経費が必要なようだ。ハンザキ煎餅の実現に向けてスタッフと検討していこうと思う。何しろNPO法人の長い存続を考えると財源を会費ばかりに頼っているわけにはいかない。何とか頑張って知恵を絞って行こう！

テナガエビ?・・・いいえスジエビです

校地に接する範囲を漁協から禁漁区に設定していただきました。子供たちの環境学習の際に多くの生き物を見てほしいことと、河川生物の盛衰を見て行きたいと考えてのことです。平成16年の台風による増水で多くの生き物が流されたことでしょう。ゲンジボタルの淋しい飛翔状況も、4年目になってようやく回復の兆しがみえます。また、上流にある黒川ダムからの夏の冷水放流は、繁殖シーズンの魚類などに大きなダメージを与えています。このような自然環境における河川生物の変化を長く追跡して行きたいと考えています。

生き物の調査をするについては色々な方法がありますが、一人でできることではないと続けられません。そこで最も簡単なモンドリを使うこととしましたが、兵庫県の条例では透明なモンドリの使用は全面的に禁止となっています。そこで、特別に調査をすることで許可を頂きました。月に一回10個のモンドリを24時間設置して、捕獲できた生物の種数やサイズを記録するものです。無論、全ての漁獲物を原状に戻すことを原則にしていますが、今月の調査ではエビを一個体だけ標本にさせてもらいました。

仕掛けたモンドリを一つずつ取り上げて中身をバケツに移して調べていきます。その中の一つに大きなエビが入っていました。一瞬テナガエビかと思いましたが、よくよく見るとスジエビです。「シラサ」と呼ばれて釣り餌などにされている透明な体のエビですが、こんなに大きい個体を見たのは初めてです。長い水族館生活の間に沢山のスジエビを見てきました。それらの採集でもこんなに飛びぬけて大きい個体を見た事はありませんでした。あまりにも巨大なスジエビが本当にスジエビなのか確かめるために水槽に収容しましたが、数日で死んでしまいました。透明な体をしているはずなのに時々白濁して不透明な体のエビが見つかります。時期によってはある場所で採集したほとんどの個体が白濁していることがあります。エビ博士の下関水産大学の元教授の林健一先生に伺いましたが、ご覧になったことがないとのことでした。標本や写真をお送りして調べていただこうと思っているうちに、現役を退き現在に至っています。約束を果たせず申し訳ないことですが、原因を知りたいので機会が有ったら調べていただこうと考えています。

この大きなスジエビも捕獲したときから白濁気味で水槽に収容してからは完全に不透明な体になり死亡しました。死んだ個体は全長で75ミリありました。死亡直後の写真を見ただくと分かりますが不透明な体になっています。いったいこの原因は何なのでしょう。変な病気で無ければいいのですが気になるところです。ところで図鑑などでは大きさについて全長5～6センチとなっています。図鑑では標準的なサイズが記載されることが多いようですが、このジャンボサイズのスジエビは記録を更新できるのでしょうか、これも楽しみなことです。7月の調査でも一回り小さいが他の個体より大きいものが入りました。生きていうちは成長を続けるということなのかもしれません。

大はんざきブロックの登場！！

「はんざきブロック」はオオサンショウウオや水生動物の生息・休息・避難・繁殖などに配慮した環境対応型のコンクリート製品です。私は気に入ったので当ニュースNo.4・13にも簡単に紹介しましたが、今回は大ハンザキならぬ大型のはんざきブロックです。3種でワンセットのブロックは、小動物用の区画とハンザキの休息と繁殖の場を考えた物です。標準サイズは横幅が1.5m、奥行きは1m、高さ70cmで重量が1.2トンのものが3個で一組、総重量は5tほどです。今回の品物は山のずり落ちるのを押さえるために倍以上の重量が求められサイズも倍以上のジャンボです。

工事現場は、当ニュースNo.21・22・23などで紹介して来ました生野ダムの下流で、生野町竹原野地区です。ここは市川の右岸から山が滑ってきて川を直角に近い状態に押曲げています。道路は絶壁と川に挟まれてかろうじて車がすれ違える幅しかありませんし歩道も幅1mほどしかなく、積雪があると除雪車の掻き退けた雪で埋められてしまいます。そこで、山が滑るのを抑えるために山の中に井戸を掘って地下水を抜きながら、井桁ブロックで表面から山肌を押さえ込んでいます。ただ抑えているだけと思っていたのですが、日本工科専門学校の学外実習で現地の説明を受けて驚きました。

山肌にコアをくり貫いてワイヤーを山の地中の岩盤にボルト止めして、その引っ張りの力で山の地すべりを止めているのだそうです。環境に配慮した工事現場の説明を土木のプロからしていただき、私自身も大変に勉強になりました。こんなことで講師を務めているのは申し訳ないことですが、学生と共により一層の勉強をしていきたいと考えています。そして、今回は川の右岸側の工事が実施されたのです。水の流れる部分の水際には「大はんざきブロック」が75基据えられています。山がずり落ちてきているのを抑えるため、かなりの重量物が据えられないと難しいことでしょう。そこで、はんざきブロックそのものも従来の標準型からサイズは2倍の大きさになり、奥行きが深くなるので生物にとっては護岸に広い複雑な空間が十分に作り出される構造になりました。その中には一抱えもあるような大きな石やU字溝、エンビのパイプなど大型動物の棲家も確保されています。私はメーカーには相談することなく勝手に「大はんざきブロック」と呼ぶことにしました。その上には5～6段も積み上げられている石詰め籠で山が動くのをとめているのです。緑豊かな山肌に、あまりにも無残な井桁コンクリートブロックや石詰め籠の工作物では折角の景観も台無しになってしまいます。

この無機質な河川工事をどのようにしたら環境配慮型に近づけることができるのでしょうか。護岸の緑化が多自然型河川工事の際の最大の問題でもあります。そこで、今回の大はんざきブロックにはネコヤナギを挿し木できるスペースを作りました。そして石詰め籠の部分ですが、隙間に現地の土を詰め込み流出防止シートを前面に入れました。写真に示すように工事中はグリーンベルトになっていますが、来年の植物の芽生えが楽しみです。



写真1 立てかけた杉の枯れ枝で産卵中のモリアオガエル



写真2 日本工科大学の瓦煎餅



写真5 黒川養魚場の「あまご丼」



写真3 大スジエビ (全長75^{mm}, テナガエビだ!)



写真6 こうちゃんうどんはハンザキ研所長お勧めの一品



写真4 大はんざきブロック 75基が並ぶ工事区域

ハンザキ研日誌

2008年6月

- 3日 トライやるウィークで養父中学生4名と八鹿土木事務所職員来所。オオサンショウウオ保護プールで餌魚への餌やりやプール内のサイフォン掃除を体験
県立やまびこの郷生徒4名と職員来所
奥銀谷地区自治協議会・すこやか部会に出席、小野大橋の餌つけハンザキの観察を1時間実施するも出現なし。
- 4日 モリアオガエルの体内卵が散乱している。今年はカラスによる食害が頻発するようになった。
- 7日 日本工科専門学校生の実習、
- 10日 第3図書室整備終了
- 11日 ヒバカリがモリアオガエルの卵を食害
生野ダム下流の工事現場で大はんぎきブロックの設置立会い
兵庫県和田山農林振興事務所より来所
- 12日 兵庫県環境審議会出席
- 15日 NPO法人地域再生研究センターの総会で新神戸へ
- 17日 県立やまびこの郷生徒5名来所
- 19日 大阪府北部農と緑の総合事務所より天王川調査の打ち合わせに来所
- 21日 モリアオガエル産卵観察会13名参加
和亀保護の会・松下さん来所
- 24日 兵庫県和田山農林振興事務所4名来所
北里大学水産学部・栃本忠良教授来所（～27日まで滞在）
- 26日 河川観察ステーションの土間にハンザキが逃げ込んでいた。21日前後の大雨で増水していたためか。シマドジョウのビッグサイズ3尾も同時に採集・初

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

今月は30日の出勤?となった。12日の夜だけ姫路の自宅で過ごしたが、夜だけで翌日にはトンボ帰りでハンザキ研に戻った。NPO法人化の準備もそうであったが、とにかくなんだかんだと忙しい毎日となっている。忙しいのはいいのだが体力がついていかないには閉口する。まだまだ若いつもり（思っていないつもりなのだが）でつつい力が入ってしまうと、夜中に体がストライキを起こす。年を考えると警告なのかもしれないが……。フィールドワークはやはり体力のある若いうちに存分にやっておくことだと痛感させられているが、まだまだ満足できないでいる。遣りたい事が沢山あって幸せなのかもしれないが……。（この印刷物はセブン-イレブンみどりの基金の助成をうけて作成しています）